

# Tennessee Williams の *Kingdom of Earth* について

## —欲望の形而上学—

山 野 敬 士

*Kingdom of Earth* は、同名の短編小説（1942, 出版1954年）を劇化したものである。異母兄弟による財産を巡る争いに巻き込まれた女性（Myrtle）が、婚約者である弟（Lot）を離れ、野性的な兄（Chicken）と結ばれることで、その兄が財産も女性も奪ってしまうというプロットを持つ本劇は、「性」の主題を「二人の男性と一人の女性」という Williams 劇の多くに見られる構造を通じて取り扱っている。1968年に *The Seven Descents of Myrtle* のタイトルのもと Broadway で初演されたが、60年代の他の Williams 作品同様、興行的な成功を収めることはできず、Chauncey Howell の “The Old Pretender has brought us a play that is in nearly every respect a parody and travesty of his great works of the past” などの、多くの批判を生むだけで、わずか29回の上演回数を記録して終了した。

Howell が揶揄したとおり、初期の作品群のパロディーである本作は、当然のことながら、観客が期待する展開を回避する。A *Streetcar Named Desire* (1947) や *Summer and Smoke* (1948) などで描かれた、道徳観と性意識の間で揺れる主人公の心理や、それを表現する劇作家特有の詩的な描写は影を潜め、「性」に関するブラックユーモア的な台詞のみが前景化されながら、2幕2場と3場の間で提示される Myrtle と Chicken の oral sex へと収斂することなどが、その最も顕著な例であろう。その後、数回の上演に合わせて改訂が施されたが、(1975年の McCarter Theatre での上演用台本が *The Theatre of Tennessee Williams* に収められている)、どの上演も成功とは言い難いものであった。本論の目的は、失敗作と烙印を押されたこの作品の形式やいくつかのモチーフについて、その新たな読解の可能性を探ることにある。

### Chicken の人種表象 —その可能性と不可能性

「40～50年代にはタブー視されていた事柄を表現する自由とスタイルを60年代に身につけた Williams は、アナーキーとしての芸術という概念を現実化した」と考察する Annette J. Saddik は、そのような芸術観において Williams の興味は「リアリズムに共通する個人の心理的問題を探求する」ことから離れ、“aspects of theater connected to the unconscious mind, favoring intuition, feeling, and experience over reason and the cataclysmic celebration of these sensory functions through ritualistic presentation” (7) に移行したと指摘する。

この本能的な性意識と理性を転倒させる試みを体現しているのは、強烈な欲望を持て余し、その欲望を宣言し続けることで弟の婚約者を奪い去る Chicken である。この人物が、白人の男性と黒人の血の入った女性との間の子供であるという事実は、劇の人種表象の考察へと読者を駆り立てるであろう。しかしながら不思議にも、そのような考察はこれまでほとんどなされてこなかった。唯一言及したのは Philip C. Kolin で、“[R]acial inequities and the ravages of colonization, crucial issues for the 1960s, lie at the heart of *Kingdom of Earth*” (229) と述べ、続けて次のように結論づける：

Through *Chicken Kingdom of Earth* initially raises all the stereotypes that have debased people of color in a colonial economy but reverses each of these damaging mythologies by standing them on their head and mocking their validation through irony, reversal, and even assaultive forays against conventional white-only wisdom. (230)

ここで、*Orpheus Descending* (1957) や *Sweet Bird of Youth* (1956) における人種表象を考察することは、意味深いことのように思われる。この2つの劇に描かれた人種表象は、端的に言う、「黒人の役割を転移された白人」の姿である。白人である Val や Chance は周囲から黒人の役割を担わされ、白人女性と性交渉を持ったという理由で殺害される。このような登場人物は、周囲から与えられる「制度としての人種」という概念に光を当て、その矛盾を暴き出す役割を担うことができる<sup>1</sup>。彼らは、人種制度を前景化する人種（メタ人種）、として定義できる登場人物なのである。劇の青写真となった短編小説では、Chicken はそのメタ人種として描かれていた。彼は、白人の父親とインディアンの母親との間の子供であり、別れた恋人から「黒人である」という虚偽を町中に広められる。しかしながら、劇中の Chicken はそのような人物ではない。彼の苦悩（黒人の使用人同然に扱われてきたことや、外見は白人であるにもかかわらず白人女性から忌避されつづけたことなど）は、黒人の血を持つものの苦悩として描かれる。確かに Kolin が指摘するように、黒人を貶めてきたステレオタイプがそのまま Chicken には与えられている。それは、奴隷制度とヴィクトリア朝的道德観の融合が生み出したアメリカ南部社会特有のイデオロギーから生じたものである。つまり、黒人男性は知性、理性に欠けており、それ故に計り知れない性欲を保持しているが、その邪悪な欲望から白人女性を守る騎士道的な役割こそが理想の白人男性像であるというものだ。このステレオタイプは、Chicken が白人女性である Myrtle と性交渉を持ち、純粋に白人である Lot に対して勝利することで、Kolin が述べる通り転倒されることとなる。

黒人であるという逆境だけでなく、洪水に象徴される自然の脅威を生き延びる Chicken の力は、現実的な人生観と溢れる性的欲望を通して描かれ、それは、亡き母親の思い出に閉じこもり、自らの死を望む Lot の弱さと対比されることで強調されている。“I think that life don't just plain care for the weak. Or the soft. I got to be hard. A man and his life both got to be made out of the same hard stuff or one or the other will break” (199) という台詞に示される彼の人生観は、人種という階層秩序に立ち向かい、それを転倒させる人間に相応しいものだろう。それは、公民権運動の拡大とそれに対する白人社会からの抑圧の再燃（1968年の春には Martin Luther King Jr. と Robert Kennedy が暗殺されている）という時代背景から、社会・政治的メッセージとして読む事が可能となる。そして、そのメッセージは、土地の所有権を Lot から奪い去る Chicken の姿に具現化されるのである。彼は土地を放棄する旨の誓約書を Myrtle に書かせる。ものとして所有されてきた黒人が、白人のものを所有するということにより、階層秩序の転倒が観客に現実的に意識されるのである。同様に、ステレオタイプの中では無知であるべき黒人が、極めて狡猾であることが示されることで、そのステレオタイプも破壊されるのである。

この人生観と並置されるのは、彼の性的欲望に関する哲学である。牧師から「淫らな肉体」(“lustful body”)を「魂の門」(“spiritual gates”)の中に閉ざさなければならないと説かれた Chicken は、“I tried to haul down my spiritual gates for a while but I seemed to be reaching up for something that wasn't in me . . . I was just created without them” (211) という結論に達する。この哲学は、反キリスト教的視点を導入することで、性を抑圧する清教徒的な道德観を嘲笑する役割を果たしている。しかしながら、それは、石塚浩司が指摘したような「暗い本能とたくまし

い動物的愛欲の賛歌」であり、作者自身の「ラプソディクな自己表現」(151)という感覚を、観客が劇に対して抱くことを可能にする、安易で非現実的な視点であることも否定できない。

「性」の主題の結論としてのこの哲学の不十分さは、人種表現と同じように階層秩序の転倒の主題を作品に見い出そうとする解釈において、更に大きな問題となるであろう。なぜなら、人間の強さを歌う Chicken の人生観とは対照的に、そこには階層転倒の結果として否定されるべき「人種と性が結びついた黒人のステレオタイプ」が再導入されてしまっており、人種の制度自体が溶解してしまう地点には決して辿り着かないからだ。嘲笑され無意味なものとするべき概念が、皮肉にもそれを行う立場の人間の自己同一性を主張する声に使われてしまうのである。

白人／黒人という二項対立と理性／本能という二項対立を並置することで、それぞれの階層秩序の転倒を図る試みこそが、皮肉にもそれを支えるはずべき視点の非対称性により溶解してしまう。結果として、Chicken の人種表象は、「性意識解放の主題を支えるべく導入されたもの、つまり抑圧されるもの(本能)が抑圧するもの(理性)を打破するという主題が、時代的な背景と適合するように埋め込まれた隠喩」としてのみ機能すると安易に解釈される可能性から逃れることはできないのである。

南部を舞台にしながらも、Williams 作品に黒人の登場人物が不在であることはたびたび指摘されてきた。Kingdom of Earth には唯一黒人の血を持つキャラクターが存在しながら、皮肉なことに、人種の主題が、人種を超えた性の主題にからめとられる運命にある。なぜなら、ステレオタイプ転倒の分析を通じて我々が見てきたように、人種の主題は性の主題を強固にすることができるが、性の主題は人種の主題をパラドキシカルにも不完全なものにしてしまうからだ。そして、このように考えると、この点こそが、この作品の人種表象に関する発言の少なさの原因であるように思えてくるのである。

### メタサイコロジーとしての劇

不十分な性の哲学は、「性」の主題自体の考察にも影響を与えることとなるであろう。まず、人種差がその中で消えてしまう傾向にあったように、性意識が現実的な個を超えた地平で、寓話的と呼べるような描かれ方をしていることが注目される。そしてそれは、「性意識しか存在しない」と自ら述べる Chicken や、エディプスコンプレックスの理論を極めて忠実に模写したような Lot の存在、加えて洪水に象徴される「死の恐怖」「性意識の解放」などから、形而上学的な側面が強調されているという印象を与えるものだ。Saddik が考察したように、この時代の Williams の心理劇は「個人の心理的問題から離れて」行ったと考えられる。つまり、Blanche や Alma の個人的葛藤の中に描かれてきた対立項が、一面的な登場人物である Chicken や Lot に割り振られ、心理とは何かを描くメタサイコロジーとしての輪郭を劇全体に与えるのである。

この意味で、洪水が迫ってきていることを Chicken に知らせる男の発言は、その姿が舞台上に無く、声だけが聞こえるということも併せて、極めて示唆的である。“But we got word that old man Sikes might dynamite his south bank levee tonight to save his north bank levee, least ten foot of water, you know that Chicken” (126). 舞台となっている土地を洪水が襲う原因は、Sikes なる人物が北側の土手を守るために南側の土手を破壊したからだというこの発言は、性意識が理性の抑圧から解放されることを暗示する。それは、「快感原則」と「現実原則」の概念が導入されたものかもしれない。性意識が洪水のように理性の土手を突き破るのである。そして、この洪水は登場人物たちに死の恐怖を与えるものとして描かれていることから、当然、心理学的な死の主題が強調され、Chicken や Lot の存在と類比されながら、「生きようとする欲望」と「死の欲望」の葛藤としても読むことができる。そして、最も興味深いことは、この発言者の名前が“psyche”

と同じ音を持っていることである。この pun により劇のメタサイコロジーとしての輪郭は象徴的に示されるのである。

登場人物たちに割り振られた役割を考えると、「理性の門が欠落して生まれ」、「淫らな肉体」のみでできていると自己認識する Chicken の役割が、いわゆる「快感原則」を表すことにあることは明らかである。そして、その原初的な欲望と対峙する役割を担わされる Myrtle は、エゴやスーパーエゴを体現する人物となるであろう。その関係は、Lot がいる2階の寝室から Chicken が居座る1階の台所へ降りていく彼女に、“*she goes down the hall steps as if approaching a jungle*” (161) という説明がなされていることから明らかであり、それは、Williams が Paul Bowels の作品に見たような「文化的なスーパーエゴが原始的なものの中で打ち破られる」(“The theme is the collapse of the civilized ‘Super Ego’ into a state of almost mindless primitivism ... 39) という主題を内包していると考えられるのである。

### 欲望と死の恐怖 — 寸断された身体

「本能」が「理性」に勝利するという主題は、当然のことながら、Myrtle と Chicken との性交渉で具体化される。そして、その急激な変化に妥当性を与えるためには、スーパーエゴが崩壊する原因となるものを設定し、安定した自我を彼女の中に設定することを避けなければならないこととなる。形而上学的な欲望の枠組みという点から考察すると、「欲望と死の対立と融合」という主題がその役割を果たしているであろう。A *Streetcar* で Blanche が告白したように「死の反対にあるのは要望」ということになるのだ(389)。エゴやスーパーエゴを体現する Myrtle は、Chicken の性的欲望を恐怖するとともに、死を暗示する洪水も恐怖する。そしてその2つの恐怖は、常に同じ場所で語られている。ナイフを持った Chicken に Myrtle が死の恐怖を感じる場面があるが、そのナイフは死の恐怖の原因であると同時に、ファリックシンボルとしても機能しているのである。

このような場面で最も印象的なのは、Myrtle が猫を抱いた Chicken と話しをする1幕4場であろう。彼女は猫好きであるにもかかわらず、それにアレルギーがあることを語る。この猫が Myrtle の性意識のメタファーであることは明らかであり、アレルギーはそれを抑圧する「現実原則」や彼女のスーパーエゴのメタファーである。1968年の上演用台本である *The Seven Descents of Myrtle* では、この猫に関する彼女の台詞に“*I had to git rid of Fluffy, it was her or me. First I give her a great big head of a catfish, which was her favorite food. Like the last supper of the condemned. Then chloroformed her*” (666) という一節が記されているが、そこには「性意識」と「理性」の対立が巧妙に暗示されている。Chicken はその猫を引き上げ戸 (trap door) から、家の周囲にまで迫ってきた水の中に投げ入れる。慌てた Myrtle が戸を覗いた瞬間、Chicken は彼女を後ろから水の中に押す。「性意識」と「死の恐怖」の融合と対立は、パニック状態になる彼女の姿に映し出され、それは彼女の自我のパニックを暗示するのである。

死の恐怖と欲望の関係を通して描かれる自我のパニックは、Myrtle とその友人たちの描写にも見ることが可能であり、その描写はメタサイコロジーという主題と呼応している。ハリウッドを目指しショービジネス界にいた Myrtle は、同じ夢を持つ3人の仲間と同居生活を送っていたことを語る。その3名は今や皆死んでおり、Myrtle が恐怖する死の具体像である。薬物中毒で死亡した女性は、現在精神安定剤を服用している Myrtle の未来の姿として彼女自身に押し掛かる。残り2名のうち1名は殺害され、もう1名は手術の失敗で死亡しているが、この2名の死に共通するのは、肉体の切断のイメージと性的欲望の存在がその背後に示されていることにある。殺害された友人について彼女は、“*Her mutilated corpse was found under a trestle.... Some pervert*

had cut her up with a knife”(145)と語っている。また、2人目の友人の手術は“illegal operation”と述べられることによって、墮胎手術だったことが暗示される<sup>2</sup>。この二人の女性の死に描かれる切断された身体の像は、彼女の死の恐怖を体現する。そして、それは pervert が行った女性に対する異常な性的攻撃性（Chicken の欲望が持つ攻撃性の隠喩でもある）や墮胎手術が示すように、性的欲望と融合した形で提示されるのである。加えて、この身体の切断のイメージは Myrtle 自身の描写にも描かれている。Myrtle は自分の経歴の出発点となった仕事について、“I been the headless woman in a carnival show. All a fake, done with mirrors! Sat in a chair and pretended to have no haid, it was done with mirrors!” (143) と述べているし、劇の冒頭で彼女を売春婦だと揶揄する Chicken は“You kick with the right leg, you kick with the left leg, and between your legs you make your living” (147) と淫らなジョークを述べるが、そこには下半身だけが強調された女性の姿が示されているのである。

自我のパニック状態と「切断された身体」のイメージの関係を考えた場合、それが、ジャック・ラカンが鏡像段階で発見した「寸断された身体の空想」という太古的イマージと同じ形式を示すことは興味深い。自我の攻撃性を暗示するそのイマージは、人間が自分自身の身体に対して持っている特異な関係から生み出され、それは、鏡に映った自分の姿の統一性からは断絶している自己自身の未統一性の表象である。つまり、鏡（社会）に映った姿と自分が自分自身に感じている姿との差異を意識することが、そこで前景化される。二宮一成が指摘するように、突き詰めれば、これは「言表行為の主体」と「言表内容の主体」つまり「話す私」と「存在する私」との間の断絶である。自明で安定したもののように思える自我に回収されないものが、自分の中に存在することに人間は恐怖を抱くのであり、それは Myrtle の場合、死の恐怖と対になった性意識なのである。

### エディプス的關係

自我や超自我の代弁者である Myrtle を介して、本能的な性意識や快感原則を体現する Chicken と対峙するのは、彼女の婚約者である Lot である。劇の前半部において、彼は彼女の超自我を生み出すものとして描かれている。Chicken の本能的な性意識に恐怖感を覚える Myrtle だが、性意識の欠落した人物ではない。なぜなら、もしそうであれば、彼女は自我を具現化する人物ではなくなるからだ。

Lot は、Myrtle と性交渉を持てないでいる。抱きしめようとする彼女に対しても、“I wouldn't be able to breathe” (135) や “I don't want to be smothered” (175) という言葉を述べ続ける。しかしながら、この「性愛の不可能性」から、Lot を「快感原則」に対する「現実原則」を体現する人物と考えることはできないであろう。彼女は Lot に対して、“you're a superior to a man” と語りかけ、続けて彼のことを“The first, the most, the only refined man in my life. Skin, eyes, hair any girl would be jealous of. A mouth like a flower” (135) と表現する。「男よりもすぐれている」や「すべての女の子が嫉妬するような」という表現は、劇の結末の性倒錯者としての Lot と呼応して、彼を同性愛者として読むことを可能とするが、同時に「人間を超えた」、「女性が嫉妬するような洗練された」美しさを表象するものでもある。ヴィーナスの神木と同じ名前を持つ Myrtle は、その名前の通り「美」を守るである。

Lot は、自分が Myrtle を性的に満足させているようにふるまうことを彼女に懇願する。それに対して、Myrtle は “Y'know, they's a lot more to this sex business than two people jumpin' up and down on each other's eggs” (136) と述べる。通常の性行為以上のものが存在することを述べるこの台詞は、例の悪名高い fellatio シーンとアイロニカルに呼応するわけであるが、「性行為

として定義されない快感原則的なもの」と呼応すると読むこともできる。それは昇華された欲望（理性と和解した欲望）に他ならず、Chicken の本能的欲望と対立し、Myrtle の「美しいものに惹かれる精神」と並置されることで、文化や芸術といった主題に連関する。彼女の自我は、劇の前半部においては、この理性と和解した欲望（美や文化）を超自我として取り込むことによって形成されているのである。

*Kingdom of Earth* における「昇華された性意識」と「本能的性意識」の対立では、後者が前者を駆逐せねばならない<sup>3</sup>。同名の短編小説の中で、Williams は、Chicken に「淫らな肉体を静めるために小説を読んでみたが、“Made-up stuff was not satisfying to me. They’s not one word of truth in all this writing, I used to think, and the fellow that wrote it is trying to fool the public” (394) であった」と述べさせることで、本能的性意識の優位を強調する。しかし、これはあくまで Chicken の心理内で起こることではなく、前述した不十分な性哲学につながる小道として機能するだけである。そもそも短編小説においては、Lot 自身が劇中のような「美しい人物」として描かれていない。対立項は存在しないのである。劇化において作者が取った技法は、「昇華された性意識」を内側から描き、それに虚偽のレッテルを貼り、最終的には「性意識」との関連も断ち切るというものである。そして、そのために導入されているのが、Lot と母親の関係に示されるメタサイコロジー的な「エディプス的關係」である。

“Do you know, do you realize what a beautiful thing you are?” とたずねる Myrtle に対して、“I realize that I resemble my mother” (135) と Lot は答える。何かを認識する (realize) ことは他者との関係から生じるものに他ならないが、Lot の場合、母との類似からしかそれが生じない。Myrtle は続けて “To me you resemble just you” と述べるが、それは応答されないものであろう。なぜなら、Lot にとっての自分自身とは母親と一体となった原初の欲望の中に定義されるものであり、その欲望は、主体と客体の区別が存在しないナルシスティックな状態に他ならないからだ。

### 死の本能

自分の死期が近いことを Chicken に知らされた Lot は、母親のイメージが強く残っている2階の寝室に閉じこもる。“The aura of its former feminine occupant, Lot’s mother, still persists in this bedroom” (154)。彼は、母親のシガレットホルダーで煙草を吸い、モナリザのような微笑みを浮かべて座っている。「モナリザの微笑み」という言葉が示すとおり、それは Myrtle にとって不可解なものである。“I wish I knew what was going on back of that long ivory cigarette holder and that Mona Lisa smile” という Myrtle の問いかけも、当然のように “I got them both from my mother” (154) と返される。“Beautiful things can only be safely cared for by people that know and love them” (129) という彼の言葉に適合する人間とは、自分と母親だけなのである。

エディプス期というより前エディプス期と考えた方が相応しいこの母子関係において、当然のことながら、亡き父親は憎悪の対象となる。彼は父親を「豚のような趣味」をした人物で、「手で食事を食べ、その手をズボンでふいていた」とののしる (158)。異母兄弟である Chicken に対する彼の憎悪も、父親の動物的な姿を兄が受けついでいることに起因する。エディプス期を通過していない Lot にとって、母親が父親に所有されていることを認識することは、絶大な恐怖である。彼は、母親のイメージが残る財産を、父親に類似している Chicken に所有されることを嫌悪するが、それは、父親が母親を所有しているという絶望と恐怖が蘇ってくるからに他ならないからである。

父親と母親の関係の中に彼が拒否しているものは「性意識」である。「なぜ母親がそんな父親

と結婚したのか」という Myrtle の質問に答えることができない (“That’s a question I can no more answer than if you asked me why God made little green apples” 158) 彼の姿に、それが暗示されている。後に Chicken は、Lot の母親がギリシア人の男と不倫をしていたこと、その男に去られた後、彼女は絶望のうちに死んでいったことを Myrtle に語る。Lot による母親の理想化は、「性意識」の無視によって可能とされていたことを、彼女は理解するようになる。そしてそれは、Lot の Myrtle に対する次の言葉によって確定的なものとなるであろう：

You’ve married someone to whom no kind of sex relation was ever as important as fighting sickness and trying with his mother to make, to create, a little elegant in a corner of the earth we lived in that wasn’t favorable to it. (160)

この言葉が示すとおり、Lot の中では、文化的な行為 (to make a little elegant in a corner of the earth) は、Myrtle の自我の中で Lot が体現していた「昇華された性意識」ではなく、「性意識との決定的な断絶」によって生み出されていると言えるのである。

このように考えると、この劇の舞台セットは非常に興味深い作りになっている。Lot が閉じこもる 2 階の寝室の隣にある部屋について、Williams は “*The stage left side of the upper half story is never used in the play and is always masked*” (125) とト書きに書いている。この決して使われない部屋は、死んだ父親の魂が存在する場所であり、同時にそれが象徴する「性意識」(Lot によって理想化された母には欠落しているが、実際の彼女の中には確かに存在していたもの) が存在する場所なのである。Lot との戦いに勝って、家を所有することになる Chicken であるが、その居場所は暗い台所だけでなく、Lot の聖地の隣に最初からあったのである。

「昇華された性意識」を超自我とすることでバランスの取れていた Myrtle の自我は、これを機に揺さぶられることとなる。母親との一体感の中にとどまろうとするナルシスティックな Lot の姿に描かれる性的欲望の放棄は、彼の死の願望と結び付けられる形で描かれているからだ。フロイトは、「性目標の放棄、すなわち非性化が、この (エロスのリビドーの) 自我リビドーへの転換と結びついている」(289) と述べたが、このリビドーの自己への逆流こそが「死の本能」をエロスから引き出すと考えられている<sup>4</sup>。つまり、「快感原則の彼岸」にある「死の本能」が舞台に登場するのである。メタサイコロジーとしての劇にふさわしく、Lot の言動はこの論理に沿って描かれている。上の言葉に対して、Myrtle は “*I’m going to devote myself to you like a religion, mystery as you are, back of that ivory holder and Mona Lisa smile*” (160) と述べる。健全な性意識に基づいて構成されていると彼女が信じていた二人の関係は、宗教のようなものと表現されることで、「本能」と「理性」、もしくは「本能」と「慣習」の転倒という劇の主題に組み込まれてしまうこととなるのである。

この「宗教」という言葉は、Myrtle の変化の中で重要な役割を果たしている。意に反して Chicken に魅かれ始める Myrtle は彼と一緒に歌を歌う。彼とのコミュニケーションが成立し始めたことを示すこの場面で、意外にも「何か教会で歌われる歌、賛美歌みたいなのを歌え」とリクエストされた彼女は “*Funny I-know lots of church songs but-can’t think of any right now*” (175) と述べる。「本能的な性意識」の前に彼女の超自我が崩壊することを暗示しているこの台詞の後、彼女は歌いだす。Kingdom of Earth ではカットされているが、The Seven Descents of Myrtle で彼女は：

My feet took a walk in heavenly grass.

All day while the sky shone clear as glass.  
My feet took a walk in heavenly grass,  
All night while the lonesome stars rolled past.  
Then my feet come down to walk on earth,  
And my mother cried when she give me birth.  
Now my feet walk far and my feet walk fast,  
But they still got an itch for heavenly grass.  
But they still got an itch for heavenly grass. (669)

と歌う。ここでは、母との関係のみによって (my mother cried when she give me birth) 示される地上と、地上に生を受ける前に存在していたはずの天上を恋焦がれる気持ちを通して、Lotの死の本能にからめとられたナルシスティックな欲望が暗示されている。「理性と和解した性意識」と「宗教」は、Myrtleが疑問を感じ始めた「エディプス的關係」と結びつけられながら語られることで、その地位を失うのである。

Lotのナルシスティックで我儘な欲望を知ったMyrtleにとって、彼の美しさは偽りのものとなる。彼が髪を金髪に染めていることを彼女に話すシーンは、その比喩として機能していると言えるであろう。LotはMyrtleにChickenが持っている財産の所有権を奪うように命じる。しかし、自分が決して彼の母親の立場には辿り着けないことを認識する彼女は、彼の策略が、母親との一体感の中に死ぬという恐ろしい欲望の実現のためでしかないことを理解するようになる。現実的な洪水の恐怖に感じていた「死の不安」は、同じく恐怖を感じていたChickenの欲望から離れ、それと対峙するために彼女の自我の一部として機能していたLotの中から生じるようになるのである。MyrtleのLotに対する“The selfish streak in your nature is wide as the river-flooding!” (178) という言葉には、それが巧みに表現されていると言える。彼女の超自我は、Chickenの本能的性意識の前に崩壊し、彼女は彼と性交渉を結ぶ。「理性／本能」の2項対立は崩壊し、一元的な「性意識」の勝利が告げられる。Myrtleは、迫りくる洪水を前にして、Chickenに次のように語る：

... thing I pride myself on is noticin' an' appreciatin' a man's appearance. Physical. I notice such things about him as a strong figure in fine proportion. Mouth? Full. Teeth? White. Glist'nin'. Why, you look like a man that could hold back the flood of a river! (208)

Lotを崇める言葉と同様に身体の1部(口、歯)を強調する彼女の言葉は、もはや「美」や「文化」には繋がらない。それは、「洪水＝死の恐怖」を押し戻す力を持った男への賛美であり、決して「死の本能」にからめとられることのない「生きる本能」の賛美なのである。それに呼応するようにChickenは：

There's nothing in the world, in the whole kingdom of earth, that can compare with one thing, and that one thing is what's able to happen between a man and a woman, just the thing, nothing more, is perfect. (211)

と述べるが、この言葉の中には、父と母の性的な結びつきを理解できなかったLotの言葉とは対照的に、唯一完璧なものである本能的性意識のみが強調されるのである。



Chicken の勝利の瞬間、Lot は母親の白いドレスと枯れた花のついた帽子を身につけ、完全な transvestite として現れる。Chicken の「エロス」の勝利は、Lot が象徴する「タナトス」との対比の中で前景化される。母親と一体になった恍惚感の中、死を迎える彼の姿は “*With each step his grasping for breath is louder, but his agony is transfigured by the sexless passion of transvestite*” (212) と示される。そこには、「死の本能」を呼び起こした彼の悲しいナルシスティックな自我が強調され、フロイトの述べる「非性化」された欲望が、“the sexless passion of transvestite” という撞着語の中に印象的に描かれているのである。ソドムとゴモラから逃げ出すことを許された人物と同じ名前を持つ Lot が、このような死を迎える背後には、例え背徳の町であったとしても、そこから逃避することは性意識の回避に他ならないという作家の信念が窺える。そしてそれは、同性愛者であった作家自身の性に対する認識と繋がっていると考えられるのである。

### Freak Show と性的アナーキー

「理性」に対する「本能」の勝利を描くこの劇が、前節で見たようにメタサイコロジー的枠組みの中で描かれる限りにおいて、心理学が受ける批判を受け継ぐことは避けられない。例えば、幼児や神経症患者の分析を通じて、神経症ではない大人の心理を考察するという心理学に対する批判等がそれにあたる。実際、この劇に登場する人物達は、「本能的性意識」のみを持つ男や、「前エディプス期」に留まろうとする男であり、「本能」の下に「理性」を抑圧し、「超自我」を崩壊させることで幸福を掴み取ろうとする女なのである。人間は本来持っているものの大半を放棄することで、人間となるわけだが、そのパラドキシカルな真実は彼らの誰にも当てはまらない。彼らは、人間でありながら、人間になるための要素を欠いているのである。極端に言うと、この登場人物たちは、Blanche や Alma の心理的描写を通じて得られるような共感を、神経症でない大人が大半を占める観客の中に生み出すことができないのである。

この観客と劇の関係を考察する場合、興味深い言説が *The Seven Descents of Myrtle* の中に残されている。Chicken という名前の由来は、以前洪水が起こった時に屋根の上に鶏と一緒に上って生き延びたことから来ている。この後、*Kingdom of Earth* では省略されている部分で、洪水が迫ることを彼に伝える男は「水が引く前に餓死するぞ」と忠告する。Chicken は “[I]f I got hungry I'd bite the haid off one of the other chickens and drink its blood” と述べるが、何とも興味深いことに、男は “I seen a man do that in a freak show once” (626) と答えるのである。Freak Show の概念をこの劇に持ち込むと、登場人物がすべてそこに存在する可能性を読者は認めざるを得ないであろう。「本能的な性」と「黒人の血が入っていること」が強調される Chicken は、白人社会が押し付けた黒人のステレオタイプ通りのイメージを与えられた Wild Nigger として、そして、母親のドレスを着て現れる Lot は、文字通り Transvestite として。Myrtle でさえも、「寸断された身体の節」で考察したように、“headless woman” として “carnival show” にいたことが示されていたのである。

Freak Show は、アメリカ南部のような古い形態の社会においては、道徳的な判断は別にして、社会が抑圧するものを社会に取り込むことが許可された特別な場所である。なぜなら、そのショーの外側では、freak 達は具体的な排斥の対象であるからだ。身体的に正常であることを階層秩序の上部に置くためには、そうでないものを排斥することが必要である。しかしながら、その秩序を認識するためには、下位に置かれているものの存在が逆説的に必要となる。このようなパラドックスは、人種や性の制度にもあてはまるわけだが、Freak Show はそのような逆説を象徴する場所である。人種と性に関する階層秩序の転倒が、Chicken によって示され、その2つの転倒が同時に行われなければならないが故に起こる矛盾点を、私達はすでに Chicken の人種表象を通

して考察した。Freak Show の枠組みはそのような矛盾から離れたところにある。そこにおいて、人々は自分達が正常であることを確認し安堵する。しかし、それは、自分達がそうであったかもしれないという可能性を意識し、正常でないものとの差異によって生み出される安堵であることを認識する場所でもあるのだ。

Williams が我々に提示しようとしたものは、このような場所であったのではなかろうか。心理学的に freak と認識される人間達を文字通り眺めることで、観客は自分達の置かれている場所に安堵する。しかしながら、その場所に安堵するためには、「異常である」と見なすものが逆説的に必要なものであり、その存在は共感を生むことはないとしても、決して消し去ることはできないのである。同性愛者であった Williams にとって、「異常である」と認識される苦痛は大きな恐怖であったろうし、因習的な南部文化の中で育った彼にとって、それは罪の意識を抱かざるを得ないものだったはずだ。Williams の友人 Gore Vidal は、“[A]t some deeper level Tennessee truly believes that the homosexualist is wrong and that the heterosexual is right” (15) と述べているが、Williams の苦痛がそのレベルから来ているとしたら、60年代以降の同性愛者解放運動の隆盛に象徴される社会の変化は何の意味も持たなかっただろう。社会的には抑制の効かないと見られてしまう自分の性意識を表現するために、彼は Chicken を生み出し、それを否定することが「死」を意味することを表現するために Lot を生み出した。それについての共感を得ることは期待せず

に。

Williams の短編小説の中に “Two on a Party” (1954) という作品がある。ともに男性相手に売春を行っている Billy と Cora という男女を主人公にしたその作品の中で、その二人の結びつきは次のように説明される。

It was a rare sort of moral anarchy, doubtless, that held them together, a really fearful shared hatred of everything that was restrictive and which they felt to be false in the society they lived in and against the grain of which they continually operated. . . . Getting around the squares, evading, defying the phony rules of convention, that was maybe responsible for half of their pleasure in their outlaw existence. (306-307)

Williams が *Kingdom of Earth* の中で、メタサイコロジーの視点で Freak Show の枠組みを通して提示したのは、Billy と Cora が分け持った道徳的アナーキー (moral anarchy) の意志に他ならないであろう。自分と同じく「異常者」というレッテルを貼られるにちがいない人物を通して、「自分達の存在を排斥することはできても、その存在を消し去ることは不可能である」と結論づけることで、Williams は「正常」であることに安堵する良識派 (the squares) を翻弄し、社会の約束事の矛盾点を突き、それをイカサマ (phony rules) だと宣言したように思えるのである。

## 注

1. John M. Clum の “The sacrificial stud and the fugitive female in *Suddenly Last Summer*, *Orpheus Descending*, and *Sweet Bird of Youth*” (Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 128-146、拙論「黒いオルフェウス Tennessee Williams の *Orpheus Descending* における人種と性一」(中・四国アメリカ文学研究37号, 2001) 37-46や「不可解な不在 *Sweet Bird of Youth* における人種・性・南部」(別府大学英語英米文学論叢34号, 2002) 17-31を参照されたい。
2. 短編小説 “Kingdom of Earth” においては、売春婦である Myrtle が、その職業に就く前に墮胎手術を受けたと考えられる一節がある。Myrtle は自分の過去について “It wasn't till then I ever worked in a house and then

- it was only to pay for an operation I'd had to have" (396)と述べている。
3. 当たり前のことであるが、本能的性意識に対する昇華された性欲の無力は、そのまま Williams 作品を内側から破壊する。なぜなら、それは芸術や文化の否定に他ならないからだ。芸術を通して芸術を否定するという自己破壊的な感覚は、この時期の長年のスランプとアルコールや麻薬量の増加という作者の実生活から生み出されたものであろう。
  4. ジル・ドゥルーズは、このフロイトの思弁的で難解な理論を「<リビドー>は自我に逆流すると、かならずおのれを脱性化し、タナトスへ奉仕することが本質的にできる置き換え可能な中性的エネルギーを必然的に形成する」(177)と総括する。

## Works Cited

- Clum, John M. "The sacrificial stud and the fugitive female in *Suddenly Last Summer*, *Orpheus Descending*, and *Sweet Bird of Youth*", *The Cambridge Companion to Tennessee Williams*. Ed. Matthew C. Roudane. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. 128-146.
- Howell, Chauncey. *Women's Wear Daily* 28 Mar. 1968. Rpt. *New York Theatre Critics' Reviews* 29 (1984): 316.
- Kolin, Philip C. "Sleeping with Caliban: The Politics of Race in Tennessee Williams's *Kingdom of Earth*", *The Critical Response to Tennessee Williams*. Ed. George W. Crandell. Westport: Greenwood Press, 1996. 226-244.
- Saddik, Annette J. "The Inexpressible Rregret of All Her Regrets": Tennessee Williams's Later Plays as Artaudian Theater of Cruelty", *The Undiscovered Country The Later Plays of Tennessee Williams*. Ed. Philip C. Kolin. New York: Peter Lang, 2002. 5-24.
- Vidal, Gore. "Selected Memories of the Glorious Bird and the Golden Age," *New York Review of Books*, February 5, 1976. 15.
- Williams, Tennessee. *Kingdom of Earth, The Theatre of Tennessee Williams, vol. 5*. New York: New Directions, 1971. 121-214.
- \_\_\_\_\_. "The Human Psyche-Alone", *Where I Live: Selected Essays*. New York: New Directions, 1978. 35-39.
- \_\_\_\_\_. "Kingdom of Earth" *Collected Stories*. New York: Valentine Books, 1985. 387-399.
- \_\_\_\_\_. *Kingdom of Earth (The Seven Descents of Myrtle), Tennessee Williams Plays 1957-1980*. New York: The Library of America, 2000. 623-705.
- \_\_\_\_\_. *A Streetcar Named Desire, The Theatre of Tennessee Williams, vol. 1*. New York: New Directions, 1971. 239-419
- \_\_\_\_\_. "Two on a Party," *Collected Stories*. New York: Valentine Books, 1985. 297-318.
- 石塚浩司. 『ウィリアムズ: 暗がりの詩人』. 東京: 冬樹社, 1985.
- ジル・ドゥルーズ. 『差異と反復』. 財津理訳. 東京: 河出書房, 1992.
- 二宮一成. 『ラカンの精神分析』 講談社現代新書. 東京: 講談社, 1995.
- ジグムント・フロイト 「自我とエス」 『フロイト著作集第6巻』. 井村恒郎、小此木圭吾他訳. 京都: 人文書院. 1970. 263-299.
- 山野敬士. 「黒いオルフェウス Tennessee Williams の *Orpheus Descending* における人種と性」. 中・四国アメリカ文学研究37号, 2001. 37-46.
- \_\_\_\_\_. 「不可解な不在 *Sweet Bird of Youth* における人種・性・南部」. 別府大学英語英米文学論叢34号, 2002. 17-31.

## Summary

### A Study of Tennessee Williams's *Kingdom of Earth* —Metaphysics of Desire—

The aim of this paper is to explore how we can interpret the subjects employed in Tennessee Williams's *Kingdom of Earth* (1968). First, we will observe the racial representation of Chicken (the only black character in Williams's plays) and examine the paradoxical situation in which his function as a black makes the will to reverse the social hierarchy possible but the representation of his sexuality makes the reversal ambiguous. Second, we will suppose that the play has an aspect of meta-psychology, analyzing the three characters by comparing them with the psychological theory. Last, we will consider the image of "Freak Show" that the author put in the play and investigate how the subjects we have discussed in the other sections will affect the relationship between the audience and the play as a Freak Show.